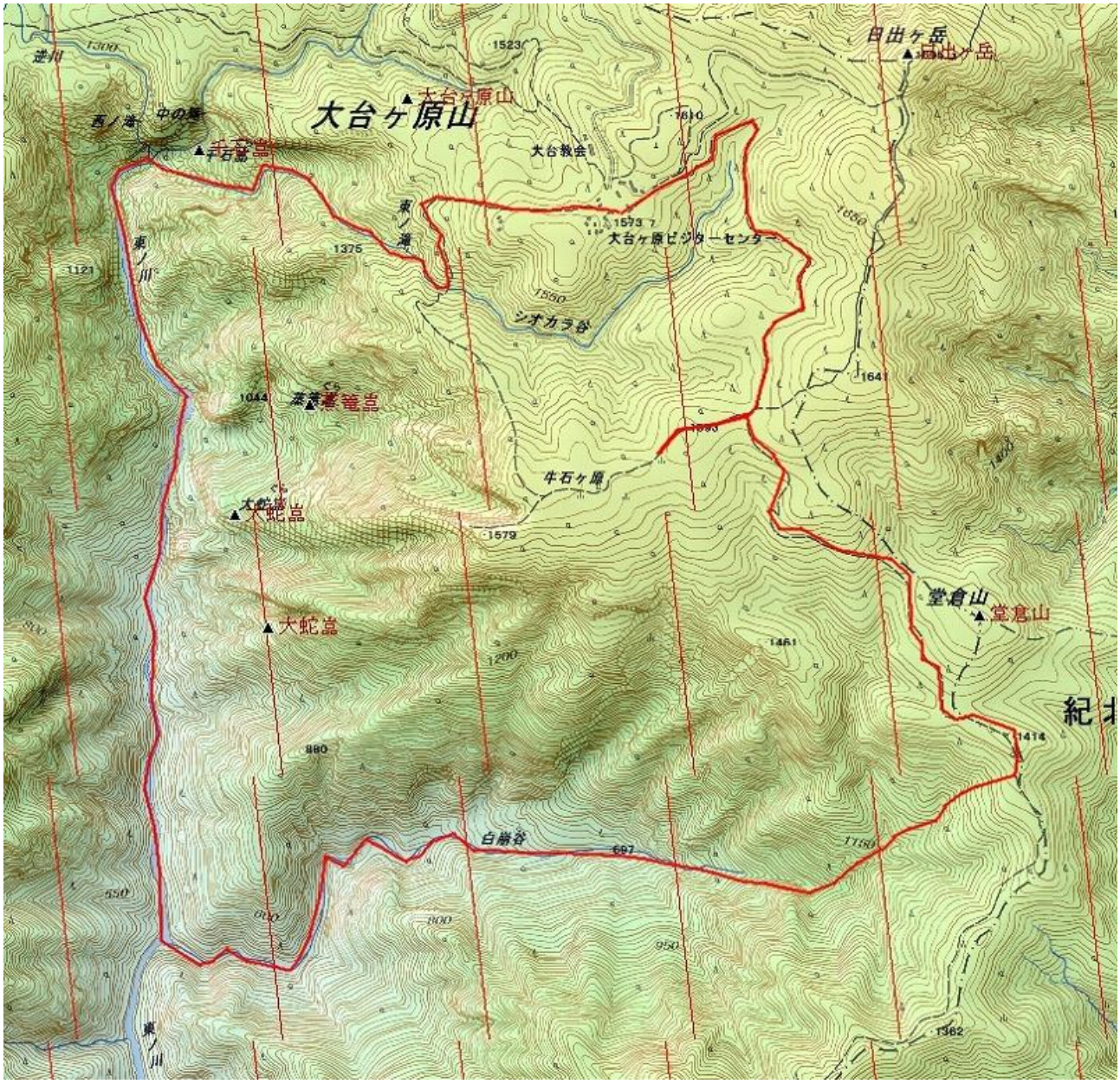
白崩谷下降～東ノ川遡行（台高）

【日程】2015 年 8 月 7 日～2015 年 8 月 8 日
【エリア】台高
【形態】沢遡行
【メンバー】Ｙ、Ｏ
【報告】Ｏ



≪ルート／タイム≫

８月７日　大台ヶ原Ｐ（8:00）～白サコ P1414（9:40）過ぎより下降開始～東ノ川本流出合（16:00）
～立派な岩小屋の手前の石垣上の台地にて幕営(17:00)

８月８日　幕営地出（6:30）～地獄釜滝(8:30）～西ノ滝（14:30）～シオカラ谷吊橋(18:00)～
～大台ヶ原Ｐ（19:00）

≪報告≫

８月７日（金）

早朝５時に自宅を出発。この東の谷計画は２０１３年の堂倉谷を遡行して以来の大台ケ原における大きな目標であった。大台ケ原の醍醐味はその遊歩道だけでは味わうことはできないだろう。台地から東へそして西へ流れ込む沢を知ることによってこそ、大台ケ原の懐を知ることができる。それが東は大杉谷から堂倉谷そして堂倉山へつながる遡行であり、西は東ノ川から西ノ滝・中ノ滝下部を経てシオカラ谷、そして遊歩道のシオカラ橋へつながる遡行、このメインの２本を遡行することではないだろうか。

さて、駐車場からは大台ケ原ピークへは向かわずに、堂倉山方面へ向かう。途中、東屋があるがここが分岐点だ。この東屋には堂倉山方面へ向かう明瞭な道標がないため、誤って大蛇嵜方面へ進んでしまう。堂倉山方面への道程はいわゆる尾鷲辻と名付けられた標識がところどころの枝に掛けられている。東や西大台ケ原の遊歩道が整備されているのとは対照的に、人の踏み跡が少ないのか荒れ気味の山道だ。

白サコの標識を過ぎ、しばらく過ぎたところに様々な色のテーピングが枝に巻き付けられている。Ｙ氏が「この辺りが下降地点だと思う」との判断のもと、沢装備の取り付けにかかる。森林地帯をさきほどから歩いているとはいえ、ネオプレーンや防水機能の付いた衣類は兎に角、蒸せる。

（上）白サコの道標。大台の森は深い。

早く沢地帯まで下降しないか、などと期待と不安を膨らませながら白崩谷への下りが始まった。
基本的に懸垂下降が必要なポイントは白崩谷にはない。一カ所、大滝を左に巻きながら下降するくらいだ。しかし、大岩が連続し、体力を消耗してしまう。またいつのまに地形が変わったのか、後半の下降は沢沿いに降りているにも関わらず、岩石の下を伏流水となって沢が流れているため、水場が全くない個所が続いている。炎天下の中で水場のない下降となり、さらに動きが鈍くなってしまった。

１６時。ここで東ノ谷本流にようやく合流する。日頃の運動不足を反省するとともに想像以上に白崩谷への道程が長く感じられた。初日のビバーク地点をどこに求めるか、Ｙ氏を先頭にしばらくは本流沿いの河原歩きが続く。

道中、出会ったのは釣り客２人。薬師堂あたりから上がってきたのだろうか。夕刻１７時前にすれ違ってからほどなく、幕営適地と思われる人工生け垣の上に台地がある場所を発見した。地図上では、ほどない地点に立派な岩小屋がある、とのことだったが発見できず（翌日１５分ほどの距離にそれを見つける）。

ツェルトで幕営設置しようかと準備の最中に、雷の後に夕立。大台ケ原は屋久島と同じ程度の年間降雨量を記録する多雨地帯である。樹林帯の中の台地にも関わらず、スコールのような雨にずぶ濡れになる。１時間程度で夕立は過ぎ去り、幕営設置とささやかな夕食。夕刻１９時には夜の帳が下り、明日の遡行本番に向けて早々に就寝する。

８月８日（土）
５時起床。天気は曇りがちではあるが一日持ちこたえそうだ。
アメ止めの滝を途中過ぎるが、巨石が行く手の視界を遮っており、これまで遡行してきた沢とは全くおもむきが違うことを実感する。

（左）二階建ての家屋のような巨岩帯がつづく。

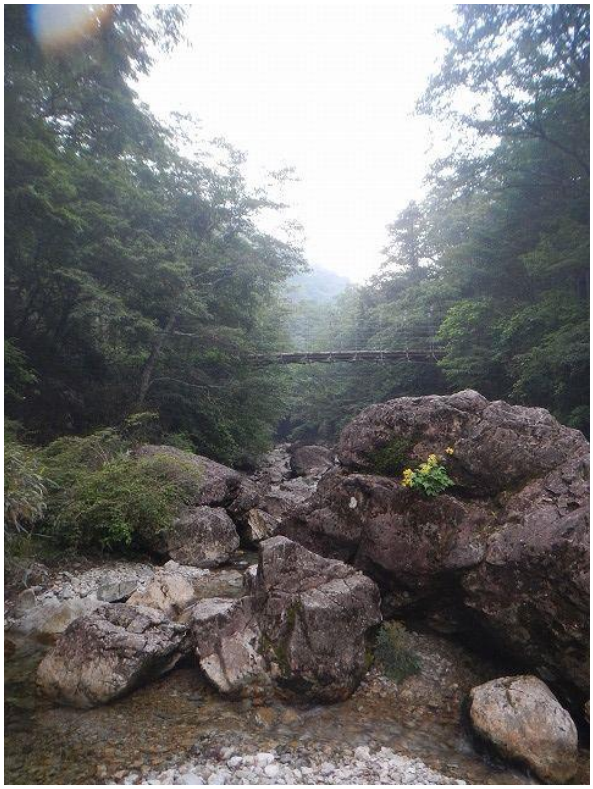
（右）地獄釜谷。釜の深さとは別に美しい滝。

地獄釜滝は、恐ろしい名前とは裏腹に綺麗な一本の布引きのような滝である。つかの間の休息を取り、茶壺嵓の下部に沿って左岸の高巻きへ。この後、西ノ滝が見えるいわゆるシオカラ谷の基点までは必死だったといって良い。大岩が連続して高巻きをせざるを得ない個所が続く。

右岸の鳥渡谷だろうか。ここの基部にザイルが残置されている。ここを無理に突破しようとしたのが、実はこの東ノ川の難易度を大きく上げたのかもしれない。反り立つような嵓があり、１ピッチ目をザイルで確保してもらいながら登はんしたのは良いものの、今度はスッパリとキレ落ちた崖に沿ってトラバースを強いられる。Ｙ氏のビレイをしながら前方を見やると、隙間から西ノ滝が迫っていることが分かった。２ピッチ目はアンダーで岩をつかむ個所、さらには確保できる岩場がほとんど無いトラバース。セカンドで確保されているとはいえ１ｍほど滑落をしてしまい、冷や汗をかく。ようやく危険個所を乗り越え、あとは懸垂下降だ。４０ｍロープがあと数ｍで無くなるところで川岸に降り立った。

西ノ滝は落差１５０ｍ、そして中ノ滝は２４５ｍと圧倒的な落差を誇る。ようやく落ち着いた休憩を取り、シオカラ橋を目指して、小振りの沢遡行に入ることが出来た。

シオカラ谷は３００ｍ程度の標高差があるものの、変化に富んだ斜滝がつづく。千石嵓をほぼ正面に見やりながら連続する滝の直登だ。上部の岩への荷揚げ、また時にはボディを使った踏み台などを駆使しながら中規模の岩をクリアしていく。



(左)西ノ谷１５０ｍの滝を見上げる　　（右）シオカラ谷を詰めてシオカラ橋に到着

東ノ川の険悪な高巻きに比べれば、高倉滝の巻き道は踏み跡がまだしっかりしており歩きやすい。さらに前進すると東ノ滝へ。これも西ノ滝などに劣らぬ立派な落差だ。地図上では２５ｍとなっているが、Ｙ氏の感想ではもっと落差はあるのではないか、というくらいの見応えだ。これも左岸を巻く。巻きを終わると、大台ケ原遊歩道から中ノ滝へつながっている滝見尾根道へ合流する。

このままシオカラ橋に向かって登山道を歩くこともできたが、完全遡行を目指して、再度ナメのあるシオカラ谷に降り立つ。滑ってもそれほど斜度はない。気力でナメの斜滝を通過すると、沢は平坦に代わり、ようやく１８時頃にシオカラ橋が見えた。

ここから大台ケ原までの登山道が最後の試練である。疲れ切った体に鞭打って、約１時間かけて駐車場へ登ってゆく。大台ケ原へは何度も来ているが、シオカラ橋を渡って駐車場への遊歩道を歩いたのはいつ以来だろうか。ひょっとしたら学生の頃から歩いていないのかもしれない、そんなことを考えながら夕暮れに沈んでいく大台ケ原の深い森の奥にある駐車場へ戻った。